

第2学年 社会科学習指導案（歴史的分野）

2年1組 男子20名 女子20名 計40名

指導者 石浦 暁子

【授業】13:00～13:50 会場 2年1組（3階）

【協議会】14:10～15:10 会場 2年1組（3階）

1 単元名 近世の日本（江戸幕府の限界）

2 単元について

（1）単元設定の趣旨

①学習指導要領における位置付け

本単元は、平成29年告示中学校学習指導要領の歴史的分野「B 近世までの日本とアジア」、「(3) 近世の日本」にあたる。課題を追究したり解決したりする活動を通して、「社会の変動や欧米諸国の接近、幕府の政治改革、新しい学問・思想の動きなどを基に、幕府の政治が次第に行き詰まりをみせたことを理解すること」をねらいとする。「交易の広がりとその影響、統一政権の諸政策の目的、産業の発達と文化の担い手の変化、社会の変化と幕府の政策の変化などに着目して、事象を相互に関連付けるなどして、(中略) 近世の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現すること」や「近世の日本を大観して、時代の特色を多面的・多角的に考察し、表現すること」もねらいとしている。

②本時について

本時では、江戸幕府が260年余りにわたって維持してきた支配体制が、19世紀半ばの国際情勢の変化に伴って、いかにして「限界」を露呈し、近代化へと舵を切らざるを得なくなったのか、その歴史的転換の構造を考察する。

江戸幕府が初期に制定した武家諸法度は、大名の軍事や私生活を厳しく制限し、幕府への忠誠を強いることで、国内の平和と独裁的な統制を維持するための法令である。これは、近世という時代の特色の一つであり、幕府以外の勢力の統制に大きな役割を果たしていた。特に本時で扱う「大船建造の禁」は、大名が強力な水軍をもつことを禁じ、軍事的な反乱を未然に防ぐものである。

しかし、19世紀に入ると産業革命を経験した欧米列強が強大な軍事力を背景に開国を迫るという想定外の国外からの脅威が訪れた。ここで幕府の舵取りを担ったのが、水野忠邦の失脚後、弱冠27歳で老中首座となった阿部正弘である。彼は、伝統と格式を重んじる幕府の重臣でありながら、それまで幕政の外にいた外様大名を含め、広く人々に意見を求めた柔軟な人物であった。幕末の動乱期において、彼が直面した障壁の一つが、まさに武家諸法度に示された「大船建造の禁」をどうするかという問題である。200年以上続いた先祖代々の法を守れば国防（外国船への対抗）が危ぶまれ、法を変えて大名に大船造りを許せば幕府の権威と統制が揺らぐというジレンマである。結局、阿部が選んだのは、古い法を守って外国に滅ぼされることよりも、法を変えて外国から日本を守ることだった。一方で、外国船の接近に伴う日本各地の沿岸防備の強化や「大船建造の禁」の解除は、薩長などの諸藩が幕府を凌ぐ軍事力をもつきっかけとなり、また、近世社会のシステムを維持してきた先祖代々の法を曲げなければ国を守れないという幕府の弱さや限界を露呈する結果となり、幕府の終焉（倒幕）に向けて自ら首を絞めたと捉えることもできる。

学習にあたっては、生徒が歴史を自分事として捉えるために、富山県の史跡（黒部市 生地台場）と関連付けて歴史を身近に感じさせたり、現代にも通じる教訓はないか考察させたりすることで、歴史から今に生かせることを学ぶ「自立した学習者」を育成したい。

(2) 生徒の実態

生徒はこれまで「仮想武士 附属 源丞右衛門は幕府の禁教令に対し、どのような選択をすればよいだろうか。」という学習課題で、歴史的分野における意思決定を伴う追究活動を行った。歴史的対象において選択・判断を扱う際、生徒が人権意識等の現代人としての価値観で判断してしまったり、既に知っている歴史の結果に思考が引きずられたりするという課題がある。そこで、「仮想武士」(モデルは高山右近) という立場を設定することで、当時の時代背景に基づいた思考を促し、結果論に陥らない意思決定を目指した。本時においても、結果を知る現代人として判断するのではなく、中世の時代を終わらせ、近世の社会を築いてきた幕府の老中になりきって、自由な判断を下せるよう支援したい。

また、生徒は近世社会における幕府の存在について、中世までの幕府と比較して、「絶対服従」や「絶対的な権力者」などと評価しており、長期政権を維持した幕府やそのシステムに対し、概ね盤石かつ機能的な印象を抱いているといえる。そこで、本時の指導にあたっては、平和な江戸時代の始まりを学習したばかりの生徒に対して、幕府が終焉に向かうというゴールを先行して提示し、そこから逆算して要因に迫る単元構成とした。完璧だと思われていたシステムにほころびが生じる幕末の事実を突きつけることで、幕府の強みが時代の変化によって弱点に転じていくのではないかとこの予想を立てさせ、既習の知識からのアップデートの必要性に気付かせる。

(3) 指導の構え

本校の研究主題である「主体性の高まりをめざす課題学習」と関連し、生徒が進んで追究したくなるような学習課題を設定した。特に、本単元を貫く問いとして、「どこに江戸幕府の限界があったのだろうか。」を設定した。260年以上続く泰平の世を支えた盤石なシステムは、なぜ幕末には終焉を迎えることとなったのか、その「限界」について、単元全体を通して解明する構成とした。幕末の老中 阿部正弘が直面した「法を変えて国内の統制を緩めるか、あるいは法を守って外国の脅威に晒されるか」という苦悩を追体験させることを通して、外国からの脅威(外的要因)だけでなく、近世社会のシステム(内的要因)に問題があったことに気付かせ、時代の「構造」に着目して単元を通じた学びが可能となると考えた。さらに、単元の終末に獲得させたい「社会のシステムは前提となる環境が変わるとかつての強みは弱み(限界)に転じることがある」という理論は、変化の激しい現代社会においても転移可能な知識であり、「歴史を学ぶ」から「歴史から学ぶ」という能動的な姿勢へと変化を促すものとする。これは、社会的事象を理解するとともに、合理的な判断の下、市民としてふさわしい行動をとる力を育む社会科の本質につながる。

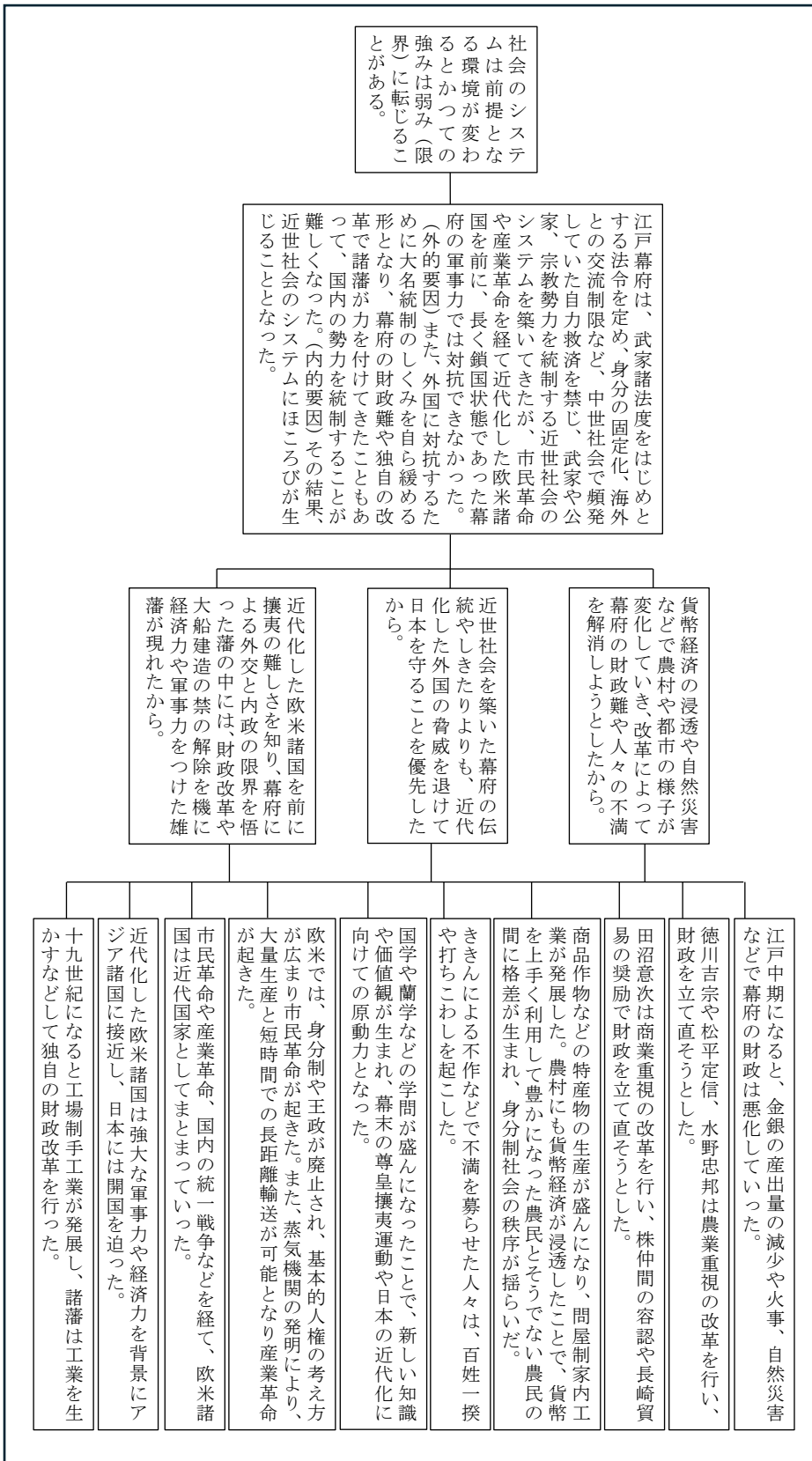
3 研究主題・副題との関連

【仮説】

生徒が、江戸初期の統制のためのシステムと幕末における国防の現実の矛盾を自覚し、自らの既習事項を状況に合わせて再構築しようとする姿を、本単元で目指す「自立した学習者」と捉える。そのために、結末から逆算する単元構成の下、江戸初期の盤石な体制と幕末の動乱を比較し、「過去の自分(既習)」と「現在の自分(新たな問い)」を往来させることで、時代の変化に応じた知識のアップデートの必要性をメタ認知し、今後の学習の見通しをもつことができる。

また、本単元で「深い学び」が実現している状態を、次の図に示した。

◆「知識の構造図と発問の構造図」

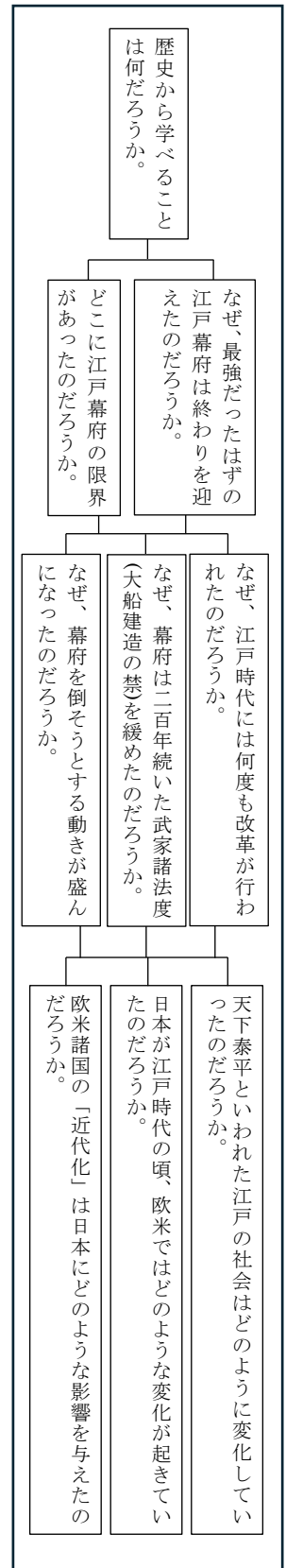


「社会的見方・考え方の成長過程図 (知識の構造図)」

一般的説明的知識

個別的説明的知識

個別的記述的知識



「発問の構造図」



4 単元の目標

- 社会の変動や欧米諸国の接近、幕府の政治改革、新しい学問・思想の動きなどを基に、幕府の政治が次第に行き詰まりをみせたことを理解できるようにする。 [知識及び技能]
- 交易の広がりとその影響、統一政権の諸政策の目的、産業の発達と文化の担い手の変化、社会の変化と幕府の政策の変化などに着目して、事象を相互に関連付けるなどして、近世の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現する力を養う。 [思考力、判断力、表現力等]
- 他者との対話から知識を得て、自らの既習事項を状況に合わせて再構築しようと、主体的に課題を追究しようとする態度を養う。 [学びに向かう力、人間性等]

5 全体計画 ※本時に関わる前後を含む

【単元を貫く問い】近世とはどのような時代なのだろうか。		全 12 時間 (本単元の前)
第 1 次	なぜ、織田信長は「天下人」になれたのだろうか。	… 1 時間
第 2 次	なぜ、豊臣秀吉は「天下統一」を果たすことができたのだろうか。	… 1 時間
第 3 次	なぜ、徳川家康は 260 年以上続く江戸幕府の基礎を築くことができたのだろうか。	… 1 時間
第 4 次	江戸時代において幕府と諸大名はどのような関係だったといえるだろうか。 ～「武家諸法度」から歴史をひも解く～	… 1 時間
第 5 次	江戸幕府は貿易やキリスト教の布教にどのように対応したのだろうか。	… 1 時間
第 6 次	仮想武士 附属 源丞右衛門は幕府の禁教令に対し、どのような選択をすればよいだろうか。	… 2 時間
第 7 次	江戸時代において、海外とはどのように結び付いていたのだろうか。	… 1 時間
第 8 次	なぜ、江戸は人口 100 万人超の巨大都市になることができたのだろうか。	… 2 時間
第 9 次	信長・秀吉・家康のうち、中世から近世への変化に最も影響を与えた武将は誰だろうか。	… 2 時間
【単元を貫く問い】どこに江戸幕府の限界があったのだろうか。		全 17 時間 (本単元)
第 1 次	なぜ、最強だったはずの江戸幕府は終わりを迎えたのだろうか。	… 1 時間
第 2 次	国を守るために、幕府はどのような選択をすればよいのだろうか。	… 2 時間 (本時 2 / 2 時間)
第 3 次	天下泰平といわれた江戸の社会はどのように変化していったのだろうか。	… 3 時間
第 4 次	日本が江戸時代の頃、欧米ではどのような変化が起きていたのだろうか。	… 5 時間
第 5 次	欧米諸国の「近代化」は日本にどのような影響を与えたのだろうか。	… 4 時間
第 6 次	どこに江戸幕府の限界があったのだろうか。	… 2 時間

※本時に関わる部分を抜粋

過程	教師による発問・指示 学習課題	期待される生徒の反応や活動 (獲得される知識・概念)
第 1 次	<ul style="list-style-type: none"> ・ 武家諸法度が制定された江戸時代初期の頃、幕府と大名の関係について、どのように評価したか。(振り返り) ・ 中世と比べて近世はどのような時代だったか。 ・ そんな完璧な江戸時代はずっと続くのだろうか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 絶対服従。上下関係。逆らうことのできないタテの関係。 ・ 意外と Win-Win な関係。厳しい統制の中でも大名が権威や威厳を示し得た互いに必要な存在。 ・ 自力救済が可能な“戦乱の世”から、自力救済ができない、統制された“泰平の世”となった。 ・ 近世は、自力救済もできず、身分が固定され、幕府以外の勢力(朝廷・公家・寺社・武家)が幕府によって統制された時代だった。 ・ 続かない。幕府は滅び、新しい時代(明治時代)になった。

	<ul style="list-style-type: none"> なぜ、江戸幕府は終わってしまったのだろうか。 ペリーが来ても、追い返せばよかったのでは？討幕運動が盛んになっても幕府には最強の軍事力があつたのでは？ 【単元を貫く問いの提示】どこに江戸幕府の限界があつたのだろうか。 なぜ、最強だったはずの江戸幕府は終わりを迎えたのだろうか。 幕末にはどのような変化が起きたのだろうか。 ここはどこだろうか。これは何だろうか。 (幕府の指示の下、幕末に加賀藩が設置した黒部市生地台場の写真を見せる。) 何のために設置したのだろうか。 この大砲で外国から日本を守れるだろうか。 そもそも加賀藩は大砲を作ってもよいのだろうか。 武家諸法度で大名が武力をもつことを制限していたのに、幕府はなぜ大砲を作る指示を出したのだろうか。 幕末に頻繁に現れるようになった外国船の来航に対して、幕府はどうしたのだろうか。 	<ul style="list-style-type: none"> ペリーが来たから。開国せざるを得なかった。 討幕運動が盛んになったから。(小学校での既習) <p>(予想) 省略</p>  <p>▲ 黒部市^{いくすだいら}生地台場</p> <ul style="list-style-type: none"> 海。海岸に設置された大砲。 海上の船を攻撃するため。 小さいから無理。太刀打ちできない。 だめ。武力につながる。武家諸法度で制限されている。逆らえば重い処分を受ける。 幕府の指示ならよいのではないか。 幕末にはペリーがやってくるから、それが関係しているのではないか。
第2次 (1/2)	<ul style="list-style-type: none"> これは幕末の様子を描いたものである。どのような場面だろうか。 絵や和歌から当時のどのようなことが伝わるだろうか。 この人物を知っているだろうか。(阿部正弘の簡単な紹介をする。) 彼は黒船来航という国難を前に、今までの幕府がしなかったことをした。それは広く大名の意見を聞くことである。皆さんは諸藩の大名になりきって、老中 阿部正弘に進言してください。 大名として幕府にどのような進言をすればよいだろうか。 	<ul style="list-style-type: none"> ペリーが黒船に乗って現れたときの様子だ。当時の日本にはない最新式の船だ。 不安で夜も眠れなくらい外国船の来航が恐ろしかったのではないか。 <p>(省略)</p>

6 本時の学習 (3/17 時間)

(1) 指導目標

- 「大船建造の禁」の解除の是非を検討することを通して、外国船の接近という国際情勢の変化によって、近世の支配システムにはころびが生じたことを理解できるようにする。 【知識・技能】
- 法を変えて国内の統制を緩めるか、法を守って外国の脅威に晒されるかについて、資料を根拠に理由付けして主張できるようにする。 【思考・判断・表現】

(2) 展開

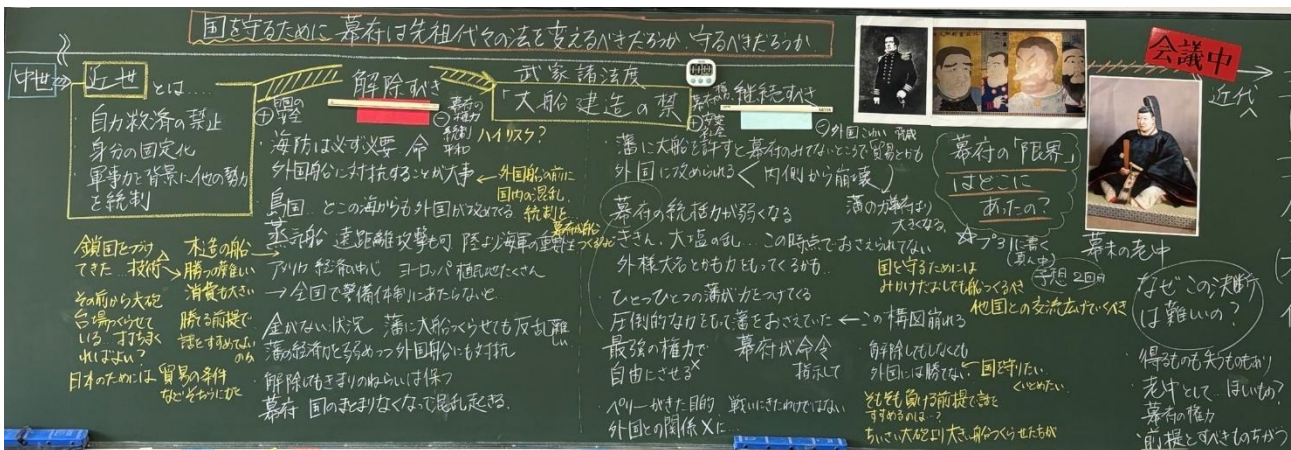
学習活動と予想される生徒の反応	指導上の留意点
<p>1 前時までの学習を振り返る。</p> <p>2 本時の学習課題を確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・近世の時代の特色を想起させ、その時代を築いてきた幕府のしくみの一つに武家諸法度があったことを確認する。 ・国難を前に、幕府は武家諸法度に示された「大船建造の禁」を解除すべきか否か、老中になりきって考えさせる。
<p>国を守るために、幕府は先祖代々の法を変えるべきだろうか、守るべきだろうか。</p>	
<p>3 全体で意見交換する。</p> <p>◆「大船建造の禁」を解除すべきである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・黒船に対抗するための軍事力を幕府だけではまかなえない。またいつ外国船が来港するとも分からないから備えるべきである。 ・幕府の財政も厳しいので、諸藩に防衛のための費用を負担させれば、国防も果たせるし、藩の経済力もそぎ落とせて一石二鳥だ。 ・諸藩が海防を担えば、外国の攻撃対象は藩に向くので幕府にとって好都合だ。 <p>【得るもの】 外国に対抗できる安全性 幕府の財政を圧迫せずに防衛</p> <p>【失うもの】 国内の統制・脅威、幕府の権威 藩が軍事力をもつ危険性</p> <p>《優先するもの》 外国に侵略されないこと</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「大船建造の禁」を継続することと解除することのそれぞれの選択において、【得るもの】(便益)と【失うもの】(機会費用)を明確にして主張するよう助言するとともに、板書に位置付ける。 ・前時での大名たちの進言について、建前と本音に着目するよう助言する。 ・幕府が選択する時の判断の基準(幕府が守りたいもの・優先すべきこと)は何か触れることができるよう促す。
<p>◆「大船建造の禁」を継続すべきである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外国船を迎え撃つ軍事力は幕府のみがもつべきだ。諸藩が軍事力をもつきっかけになってしまうかもしれない。このルールのおかげで幕府は長期政権を担えたのだから変えるべきではない。 ・藩の進言する幕府のための意見は建前で、軍事力をもつ口実がほしいのではないか。 ・大船や海岸防衛のための費用を藩に負担させると、藩の財政に痛手となるので、大名たちの不満を買うことになる。 <p>【得るもの】 国内の統制、幕府の権威 藩が軍事力をもたない安全性</p> <p>【失うもの】 外国に対抗できる安全性 藩の幕府に対する不満</p> <p>《優先するもの》 幕府の権威・国内の統制</p>	<p>学習評価の観点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・法を変えて国内の統制を緩めるか、法を守って外国の脅威に晒されるかについて、資料を根拠に理由付けして主張している。 【思考・判断・表現】(発言・ワークシート記述)

<p>4 反論がないか小グループで意見交換する。</p> <p>5 反論について全体で意見交換する。</p> <p>6 国を守るために、幕府はどのような選択をすべきかこれまでの討論をまとめる。</p> <p>7 なぜ、幕府にとってこの決断は難しいのか考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・200年続く伝統も守りたいし、外国からの脅威からも日本を守りたいから。 ・法を変えて国内の統制を緩めるか、法を守って外国の脅威に晒されるか、どちらを選んでも必ず失うものがあり、これまでの幕府のやり方が通用しなくなったから。 <p>8 単元を通した問い「どこに江戸幕府の限界があったのか」について、本時の学習を踏まえて推論する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外国船の来航を突き返すだけの軍事力がなかったのでは。 ・家康が幕府を開いた頃のような強大な力を幕府が持てなくなったのでは。大名たちを統制できなくなったのでは。 	<ul style="list-style-type: none"> ・討論の様子を踏まえて、幕府としてどうすべきであったか改めて問い、判断することが難しいことに気付かせる。 ・「大船建造の禁」の解除と継続のどちらの選択肢をとっても失うものが大きく、近世社会を築き上げてきた幕府の完璧な統制システムが崩壊へと向かわざるを得ない状況であったことを理解させる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>学習評価の観点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「大船製造の禁の解除」の是非を検討することを通して、外国船の接近という国際情勢の変化によって、近世の伝統的な支配システムにほころびが生じたことを理解している。 【知識・技能】 <p>(発言・ワークシート記述)</p> </div>
---	---

(3) 授業観察の視点

- ・生徒が、江戸初期の統制のためのシステムと幕末における国防の現実の矛盾を自覚し、自らの既習事項を状況に合わせて再構築させることを促すために、「大船建造の禁の解除」の是非を検討することを通して、外国船の接近という国際情勢の変化によって、近世の伝統的な支配システムにほころびが生じたことを理解するための授業構成（学習課題、発問、資料提示、意見の取り上げ方などの手立て）や幕府の結末から逆算する単元構成は適切であったか。

(4) 板書計画



(5) ルーブリック (本時の評価)

	知識・技能	思考・判断・表現
A	「大船建造の禁」の解除の是非を検討することを通して、外国船の接近という国際情勢の変化による外的要因と、近世の伝統的な支配システムにほころびが生じた内的要因のいずれも踏まえて理解している。	法を変えて国内の統制を緩めるか、法を守って外国の脅威に晒されるかについて、複数の資料を根拠に理由付けして主張している。
B	「大船建造の禁」の解除の是非を検討することを通して、外国船の接近という国際情勢の変化による外的要因と、近世の伝統的な支配システムにほころびが生じた内的要因のいずれかを踏まえて理解している。	法を変えて国内の統制を緩めるか、法を守って外国の脅威に晒されるかについて、資料を根拠に理由付けして主張している。(資料を根拠にしているが理由付けが不十分である場合や理由付けはしているが根拠が不十分である場合を含む。)
C	上記を理解することが不十分である。	上記を主張することが不十分である。

〔主な参考文献〕

【方法論】

- ・ 岡崎誠司『社会科の授業改善 1 見方考え方を成長させる社会科授業の創造』風間書房、2013年
- ・ 森分孝治『社会科授業構成の理論と方法』明治図書出版、1978年
- ・ 森分孝治・片上宗二編『社会科重要用語 300 の基礎知識』明治図書出版、2000年

【内容論】

- ・ 荒木裕行・小野将 (編)『日本近世史を見通す 3 体制危機の到来—近世後期—』吉川弘文館、2024年
- ・ 上白石実『幕末の海防戦略 異国船を隔離せよ』吉川弘文館、2021年
- ・ 後藤敦史『阿部正弘—挙国体制で黒船に立ち向かった老中』戎光祥出版、2022年
- ・ 藤野保『江戸幕府崩壊論』塙書房、2008年
- ・ 横山伊徳『日本近世の歴史 5 開国前夜の世界』吉川弘文館、2013年